



## 馬耳東風

毎年この時期、12月号の「馬耳東風」記事として新年を迎えるに相応しい希望が持てる、明るい話題はないものかと思案している。ところが最近、心が暗雲に覆われたように爽快な気持ちになれないことが多く、景気指数ならぬ感情指数はいつも低迷している。

気持ちの上ではまだ老人と言われるのにはいささか抵抗感があるが、世間で言う高齢者の仲間入りしている小生、「勤勉」を人生の指標に、働き蜂として日本経済が右肩上がりの良き時代を生き抜いてきた世代の一人として、退職により肩の荷を下ろした開放感は何物にも代えがたい高齢者の特権と感じていた。しかし、洋の東西を問わず急速に荒ぶ世の中、安穏として余生を送れる環境が崩れつつあることをひしひしと感じている。

最も憂慮していることは世代間・世代内格差の問題であり、社会保障制度にかかわる問題である。昨年度、社会保障給付金は総額で116兆円を超えており、その約6割が保険料で賄われた。今の社会保障制度は結局、賃金を得ている現役世代が高齢者世代へお金を移動することで支えられている制度である。人口が減少基調に転じた今、今後、勤労者数は確実に減少してゆく。

新卒者の就職率は上昇しているとはいえ、低賃金の非正規雇用者への移行が急速に進みつつあり、生活基盤形成期の働き盛り世代の実質賃金が減少している。これでは高齢者を支える余裕などなくなってしまう。高齢者は貯蓄があるからもっと消費して景気の底上げに協力すべきだとしばしば耳にするが、そう言われても物資が乏しい時代、倹約を美德として育てられた世代としてはなか

なか「消費は美德」へと頭が切り替えられない。

厚労省の見通しによれば、2025年には75歳以上の高齢者が2,178万人、一人暮らしの高齢者が447万人、さらに認知症患者が約700万人、介護の必要性が高くなる者が2,200万人に達すると予想されている。高齢者人口が急速に増加しつつある現実、どう考えてもこのまま推移すれば社会保障給付金はますます増加するであろうし、制度が維持できなくなることは明白である。社会保障制度の破綻を回避し、世代間格差を無くすためには働く世代の負担額を上げるか、高齢者の受領額を減らす以外に方法は無いように思われるが、現状を考えれば高齢者の年金受給額の更なる減額は避けられそうにない。今、賃金格差の拡大、所得税の逆累進税率的な税制などが問題視されているが、富の再配分が十分に機能する制度に移行できなければ犯罪の増加など社会不安が益々増大するのではないかと心配である。相変わらず為政者の利己主義的で無責任な言動が社会に怒りの種を振り撒いているが、勤労者には希望を与え、高齢者には老いを楽しむ余裕が感じられる社会の実現を目指して国民に信頼される政治を行ってほしいものだ。

今年もまた、原稿締め切り間際にノーベル医学生理学賞が大隅良典氏に授与されることが決まったという大ニュースが入ってきた。昨年に引き続き医学生理学賞の受賞であり素晴らしいことである。流行に惑わされることなく鋭い洞察力と飽くなき探求心により達成された大きな成果は、後進に対しても大きな夢と希望を与えたことであろう。失われた20年を嘆いても取り返しはできない。来年こそ明るい年になるよう期待したい。

(青)